



羅針盤

鶴田 大輔
Daisuke Tsuruta

大阪公立大学大学院医学研究科皮膚病態学 教授



バーチャルスライドで素早く病理エキスパートに！

はじめて日本皮膚科学会編集の『実践！皮膚病理道場 バーチャルスライドでみる皮膚腫瘍 [Web 付録付]』（医学書院）を手にとったときの衝撃は忘れられない。皮膚病理組織学の教科書は私が皮膚科医になったときには、Lever の病理組織学（“Lever’s Dermatopathology : Histopathology of the Skin”）のみが普及していたといえよう。日本語では Nasemann の翻訳書、池田重雄先生の『皮膚病理組織学』だけで、いずれも白黒写真のみであった。現在の百花繚乱ともいえる、カラー写真入りかつ日本語の皮膚病理組織学の教科書はいずれも素晴らしい。しかし、やはり、バーチャルスライドで実際に手を動かし、目で感じながら皮膚病理組織学をみることができた衝撃はすさまじく、正直に凄いと思った。

皮膚病理組織学は、私の考えではミクロの小宇宙である。1枚のプレパラートの上に無数の星（バックグラウンドの皮膚構成細胞＋浸潤細胞）があり、その星達の相互作用をみたり、個々バラバラに棲み分けたり、なかには喧嘩したりの状態が、時間を切り取られて存在しているのである。残念ながら現在の皮膚病理組織学ではヒトの場合、時間経過を追うということはなかなかできないと思われる。医師にとっても患者にとっても一期一会である。患者にとっては人生最大のイベントの一つ。皮膚を傷つけてそこから可能な限りの情報を医師が読み取り、患者治療に役立てるのである。そういう意味では、既存のワンショット写真のみのテキストではいくら写真が素晴らしくても限界があることは自明であろう。ワン

ショット写真ではミクロの小宇宙が再現できないのである。このため、『実践！皮膚病理道場』のようなバーチャルスライドを駆使したテキスト、問題集が必要であることを私は痛感している。現在、われわれの大学ではバーチャルスライドシステムを幸いにも導入することができ、1週間に30症例以上のスライドを検討することが可能となっている。このシステムを導入するまでは、プレパラートを1枚ずつ取り出し、顕微鏡でただ黙々と、4段階変速（20, 100, 200, 400倍）で見続けるのみであったが、現在は、倍率については無段階変速で、しかも顕微鏡の前に順番待ちもせず、いつでもどこでもみることができる。しかしながら、30症例は網羅的であるはずもなく、疾患の偏りもある。きわめて稀な疾患をみる機会に限られる。このため、普段のトレーニングとしてはこれだけでは不十分であろう。

今回の特集は、例をみないバーチャルスライドによる問題集である。実際にバーチャルスライドをみて、自分で診断し、この領域のエキスパート達の解説を読む。また、バーチャルスライドであるので、疑問があれば、身近な先輩に質問することも容易である。実は私自身がこういう特集を欲していたのである。追加として、時には、診断と無関係の小宇宙も眺めてほしい。新たな発見があるはずである。

さあ、皆様、ぜひ一緒にバーチャルスライドの世界を堪能し、素早く病理エキスパートを目指しましょう。